

教職協働における授業運営 — 初年次教育科目のピアサポーター育成に職員が係わる有効性（その1） SAⁱ アンケート結果から —

御 厨 まり子^{*}

1. はじめに

明星大学全学共通初年次教育科目1年前期必修科目「自立と体験1」の授業が2016年度で7年目を終えた。約2,000名の学生が、7学部横断の30人クラスに編成され約70クラスに分かれて授業を受ける。担当教員は、各学部等から選出された約50名の専任教員と明星教育センター所属の特任・常勤教員らが担当する。この授業では、教育目標に基づき、共通の教案・ポートフォリオを用いて授業が行われる。他方でこの授業運営を支える大きな要因の一つが、スチューデント・アシスタント（以下「SA」という）、ティーチング・アシスタント（以下「TA」という）として上級生が関わっていることである。ピアサポーター的な役割も含め、主に学部生が各クラス1～2名程度SAとして関わっている。

2010年度から2016年度までSA／TA（以下「SA」という）から感想を兼ねた終了時アンケートを提出してもらっている。7年間分のSAアンケートから、SAが授業を通じて感じている事項を確認し、今後その育成に職員がどのように関わりを持てるかを考え、より良い授業運営を目指すための実践報告を行うこととしたい。

2. 初年次科目「自立と体験1」の授業概要

(1) 授業概要

「自立と体験1」の教育目標は、「明星大学に学ぶ学生としての自分を理解し、各自の理想や目的を明確にしていくこと」である。授業は担当教員用の共通の教案に基づき、学生全員に配布するポートフォリオを使用して行われる。授業構成は3節に分かれており、第1節「人と関わる」、第2節「人と関わる・学びのスタートを切る」、第3節「大学生活を見通す」となっている。

(2) 担当教員

毎年68クラスの約63%となる45名の担当教員が各学部から選出され授業を担当する。7年間で延べ471クラス、延べ372名の教員が担当している。

(3) 授業運営

明星教育センターでの授業運営においては、次の点が特徴的である。①各クラス1名ないし2名のSAを配置する。②明星教育センターが学生向けのポートフォリオの作成・出版、および担当教員向けの教案を作成する。③明星教育

^{*} 明星大学明星教育センター事務室課長

センターで作成した教材は、事務室で一括して準備する。④毎週金曜日に担当教員を対象としたランチミーティングを開催する。⑤毎週火曜日に学内教職員向けに「自立と体験1」ニューズレターを発行する。⑥2回連続した欠席学生への電話連絡を明星教育センター所属教員が行う。⑦明星教育センター所属教員が各学部等から選出された担当教員の授業上での相談等に応じられるようなアドバイザー制も導入をしている。

3. 「自立と体験1」におけるSAの役割

(1) SAについて

授業運営上でも大きな役割を果たすのがクラスに配置するSAである。7年間でSAは表1のとおり、増加傾向である。学年では2年生が多い。2010年度は「自立と体験1」の授業を受講したことがない上級生であったが、現在は、SAを希望する学生（留学生除く）は、全員「自立と体験1」の授業を受講しており、上級生であるSAと、授業を受講している際に接していることとなる。

SAになるためには、3通りの方法がある。第1は、明星教育センターが1年生対象に「自立と体験1」授業最終日にSA募集の公募チラシを配布→希望者に対し説明会実施→SAになるための勉強会・説明会に参加する。第2は、既にSAの経験がある学生に対して、明星教育センターより次年度以降のSA希望有無を確認→SAの事前勉強会・説明会に参加する。第3は、授業を担当する教員からSA候補生として学生を紹介→SAの事前勉強会・説明会に参加する。SAの事前勉強会・説明会は、SAとしての役割と仕事を理解させることに重点を置いている。

SAは、受講する1年生にとっても、担当する教員においても、明星教育センターとしての授業運営の面でも必要なキーパーソンとなる。その役割を共通理解のもとで1年生や各クラスの担当教員と関係性を築いてもらうことが重要となる。

表1 学度別SA人数ⁱⁱ

人数 \ 年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	計
SA実人数計	40名	52名	51名	58名	83名	92名	102名	478名

(2) SAの仕事内容

SAの仕事は、授業開始30分前に朝礼に参加したのち、明星教育センター内の資料を持参し、教室へ向かうところから始まる。教室に到着したのち、授業の準備、1年生への声掛けからはじまり、担当教員との簡単な打ち合わせののち授業がスタートする。授業では、担当教員の指示を受けながら、SAの役割を果たしていく。授業終了後は、また明星教育センターへ資料や資材を返却し、業務日報を記入したのちにSAの業務は終了する。原則、SAが担当するクラスは、同じクラスを15週間担当することになっている。

(3) ピアサポーターとしての役割

各クラスのSAは担当教員の指示で、授業を円滑に進めるために、様々な役割を担っている。例えば、1年生にとっては、担当教員より1年生に近い立場で、1年生が授業に取り組むためのピアサポート役となり、1年生のよい先輩としてのファシリテーターでもある。また担当教員にとっては、教員とコミュニケーションをはかりながら、授業のサポート役となる。明星教育センターとしては、一緒に良い授業にするための運営スタッフでもある。

(4) SA になるまでの準備・手続き

SA 業務開始の半年前から準備がスタートする。SA 説明会に必ず参加し、諸手続きや提出書類についての説明を受ける。また SA をなぜ志望したかの動機等も記載させ、SA になるための意欲を確認した上で、2 月からの SA 事前勉強会・説明会に参加させていく。SA となるための勉強会に参加した SA は、3 月末に自身の履修登録を行い、授業の空き時間に「自立と体験 1」の SA ができるか否かを確認し本人が自己申告する。4 月上旬に SA が出来る人数が確定し、その後担当教員と組み合わせたのち、授業開始 1 週間前に SA 自身に担当するクラスを知らせる。

4. SA の終了時アンケートについて

(1) 授業後の SA アンケートの実施

SA を担当した直後に終了時アンケートを実施している。7 年間実施し、回収については表 2 の通りである。

表 2 2010～2016 年度 SA アンケート回答数

単位：人数

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	計
SA 数	40	52	52	68	83	92	102	478
アンケート回答数	26	43	29	38	54	54	51	295
回収率	65%	82.7%	55.8%	55.9%	65.1%	58.7%	50%	61.7%

(2) 担当した感想

SA に担当した感想を、「①充実した体験だった、②大変だった、③進めやすかった、④難しかった、⑤自分自身の学びになった」ⁱⁱⁱ から複数回答で尋ねている。2010 年度から実施しており、設問項目の表現を多少修正しているが、7 年間の結果は以下の通りである（図 1）。年度別の傾向には大きな差異はなく SA 自身が、SA として授業に接する

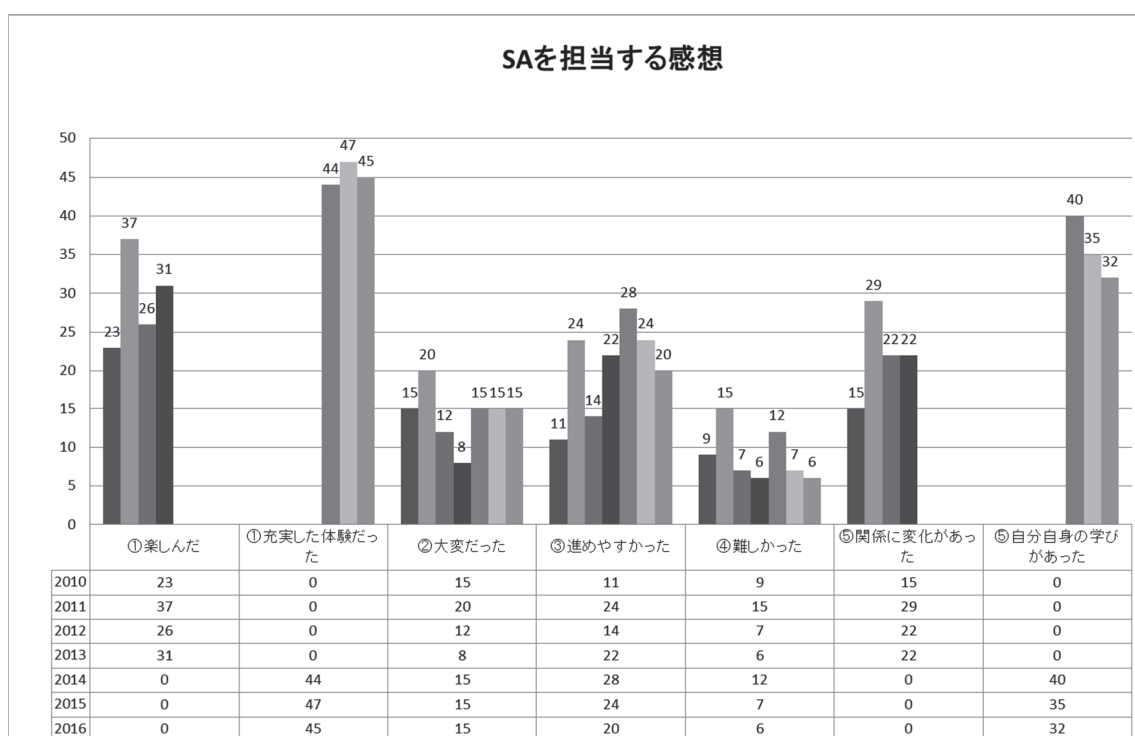


図 1 SA を担当した感想（2010～2016 年度）

ことで、充実した体験だと実感し、学生自身の学びにつながると感じていると捉えられる。

感想5項目（複数回答可）を、なぜ選択したかについて、さらに具体的な理由（自由記述）で尋ねている。回答295名中288名（61.7%）回答があり、その語彙分析をしたのが下記表3の通りである。スコアはその文章の中でその単語がどれだけ特徴的であるか表している。SAは、1年生との関わりの中で、授業を「補助」、「関わる」、「進める」、といったピアサポート役であることを実感している。ここからも学生たちがSA体験を通じての学びを感じていることが推測できる。

表3 SAを担当した感想の具体的コメントの語彙出現頻度（2010～2016年度）

■名詞	スコア	出現頻度	■動詞	スコア	出現頻度	■形容詞	スコア	出現頻度
1年生	477.38	151	できる	4.26	68	楽しい	7.84	46
授業	54.88	76	思う	1.6	53	良い	1.03	25
学生	15.13	31	関わる	21.8	27	やすい	3.03	22
大変	6.03	29	くれる	0.83	26	多い	0.59	14
補助	48.64	28	進める	13.92	21	難しい	1.51	13
グループ	14.08	27	出来る	1	19	嬉しい	0.44	9
先生	2.72	23	話す	2.05	16	よい	0.17	8
体験	5.62	17	見る	0.15	15	いい	0.03	7
SA	11.64	17	学ぶ	4.43	15	親しい	6.83	6
自身	3	13	いく	0.28	13	上手い	0.46	5
交流	6.23	13	聞く	0.41	13	面白い	0.17	5
経験	1.87	13	感じる	0.99	13	新しい	0.09	4
機会	3.42	12	なれる	1.18	11	すごい	0.05	4
自立	13.65	12	考える	0.31	11	悪い	0.03	3
自分自身	7.7	11	受ける	0.83	10	深い	0.14	3
充実	3.02	10	かける	0.38	9	少ない	0.1	3
学部	15.85	10	話しかける	2.32	9	うれしい	0.1	2
考え方	4.03	10	しまう	0.14	9	大きい	0.04	2
考え	2.78	10	楽しむ	0.4	7	にくい	0.07	2
担当	2.26	10	行く	0.05	7	欲しい	0.01	2
成長	1.81	9	楽しめる	0.87	6	初々しい	3.17	2
意見	1.22	9	振り返る	1.45	6	若い	0.06	2
最後	0.56	9	もらえる	0.51	6	早い	0.01	2
SA	5.6	8	知る	0.1	6	明るい	0.12	2
コミュニケーション	2.9	8	言う	0.02	6	堅苦しい	0.42	1
形式	1.94	7	重ねる	1.61	5	大人しい	0.07	1
多く	0.76	7	伝える	0.4	5	仲良い	0.09	1
様々	1.94	7	思い出す	0.27	5	づらい	0.05	1
最初	0.48	7	入る	0.05	5	なつかしい	0.15	1
大学	0.51	7	接する	5	5	やわらかい	0.13	1

(3) 自由記述欄での感想

アンケートの最後に自由記述欄を設け感想を寄せてもらっている。273件の自由記述での感想についても語彙分析を行った。授業での様子や1年生や担当教員との関わり、SA同士の関わりを含め、SAとして授業に携われたことを「貴重」な「経験」であったとする語彙が多く見られる。最初は不安などを感じたようであったが、徐々に授業が進むにつれてのクラスの変化や1年生との関係性がみえはじめ、最後には、「楽しい」、「良い」「嬉しい」という語彙が多く出てきている。

表 4 SA アンケートの自由記述欄による語彙出現頻度 (2010 ～ 2016 年度)

■名詞	スコア	出現頻度	■動詞	スコア	出現頻度	■形容詞	スコア	出現頻度
授業	164.74	143	思う	21.09	195	良い	13.18	91
1年生	307.96	111	できる	13.71	123	楽しい	20.64	76
SA	242.83	107	ござる	22.59	55	よい	3.74	38
学生	96.76	88	出来る	6.49	49	多い	1.7	24
先生	23.99	71	感じる	8.47	39	いい	0.34	23
体験	51.19	57	考える	3.07	35	嬉しい	2.82	23
経験	20.94	46	くれる	1.18	31	すごい	0.75	16
来年	32.05	44	学ぶ	17.22	31	難しい	2.27	16
自立	75.95	35	関わる	27.78	31	やすい	0.77	11
機会	21.17	32	いく	1.31	28	ほしい	0.42	9
大変	6.86	31	話す	5.68	27	大きい	0.31	6
補助	48.64	28	受ける	4.23	23	面白い	0.25	6
クラス	16.82	27	いただく	2.89	20	うまい	0.27	5
充実	17.74	26	見る	0.23	19	短い	0.94	5
成長	10.77	23	違う	1.1	16	優しい	0.19	4
大学	4.38	21	しまう	0.44	16	上手い	0.17	3
自分自身	14	20	聞く	0.41	13	長い	0.08	3
担当	6.91	18	なれる	1.63	13	無い	0.04	3
生活	2.77	17	知る	0.41	12	興味深い	0.58	2
自身	5.01	17	伝える	2.21	12	恥ずかしい	0.07	2
学部	33.13	16	言う	0.08	11	早い	0.01	2
内容	2.26	15	持つ	0.36	11	広い	0.15	2
後輩	9.56	15	かける	0.57	11	軽い	0.08	2
貴重	10.32	14	広がる	2.11	9	辛い	0.05	2
今回	1.21	14	変わる	0.45	9	素晴らしい	0.05	2
不安	3.78	14	取り組む	5.22	8	うるさい	0.03	1
最初	1.61	13	分かる	0.33	8	遠い	0.03	1
年間	2.53	13	進める	2.32	8	明るい	0.03	1
コミュニケーション	6.17	12	出る	0.09	8	照れくさい	0.58	1
今後	2.78	12	入る	0.12	8	づらい	0.05	1

5. まとめと今後の課題

授業後の SA の 7 年間分のアンケートでは、「自立と体験 1」の SA 体験を通じて自分自身が成長していると実感している学生が多いことが改めて確認できた。今後も「自立と体験 1」に於いては、SA が今までと変わることなく大きな役割をもつと考えられる。他方で、1 年生にとっても、担当教員にとっても、SA の存在が大きいことから、好循環の場合であれば問題ないが、SA 自身が自分の役割を理解しないまま SA になると、授業がうまく成立しないことも予測される。

故に、センター教職員が日頃から SA も成長するという視点をもつことが重要だと考える。単に SA の勉強会等を実施しただけでは十分ではないと考える。センター職員が日頃から SA 学生と接する機会が多くある。SA の個性や持ち味を生かしつつ、SA も日々成長するという視点を持つことで、SA を個別に指導していくことも可能となり育成に貢献できるだろう。

そこに職員として関わる有効性としては、授業以外の場面で SA を授業運営スタッフの一員として理解し、フォローしていくことだと考える。職員は、SA と授業外の時間に関わりを持つことが、担当教員以上に多い。100 名以上いる SA に、SA の持つ大きな 3 つの役割を認識させていくことにおいては、職員が係わる意義はあると考える。SA が多いため、センター職員がすべてに対応するには限界があるが、経験者の SA とコミュニケーションを密にはかすることで、センター職員が経験者の SA をフォローし、新規 SA を経験者の SA がフォローする好循環な仕組みができるのではないかと考えている。SA 同士間で自然にピアサポーターとしての風土を醸成するにも職員が係わることは有

効だと考えている。

なお、その好循環を醸成させるにおいて、今後の課題として、次の2点が考えられる。

(1) SA 育成の視点を教職員で持つ大切さ

SA は授業運営で大きな存在である。SA 自身は、本授業を通じて成長を実感していることがアンケートでも確認された。担当教員にとって SA は、授業サポート役ではある。センター職員にとっては、SA は授業運営の大きなスタッフの一員であるため、スタッフとして機能するために助言アドバイスをを行っている。担当教員の負担が大きくなるかもしれないが、担当教員や職員も SA 育成の視点も兼ねて授業を担当することにより、SA はより1年生にとってよき先輩としての見本となると感じる。SA 自身への学びが促進されることから SA 育成という視点を持つていくことがより重要になるだろう。

(2) SA 希望者と志望理由を鑑みた研修のあり方

SA を希望する学生は増加傾向である。SA 導入時には、①もともと人前で話すことが得意である、②将来、教員になるための訓練・準備としたい、③誰かのために何かの役に立ちたい、④クラスにいた先輩 SA のようになりたい等の学生を想定していた。しかし、近年は、当初想定されていた学生以外の学生も SA を希望するようになった。例えば、①人前で話せないから出来るように頑張りたい、②人見知りで引っ込み思案な性格を直したい、③コミュニケーションをとるのがやや苦手なので克服したい等、得意でないことをこの授業を通じて学生自身の苦手な部分を克服したいという理由で希望する学生が増えてきた。

SA を志望する学生の理由は様々であっても良いと考える。故に、その志望動機などにも鑑み、SA 育成という視点で日常の接する機会や勉強会および担当教員との組み合わせも検討しなくてはならないと考える。

今後は、SA を希望する学生の動機なども分析し、研修内容や授業改善へつなげていく点においても、職員は大きく関与できると考えている。

参考資料

- ・ 2005 年明星大学明星教育センター編「自立と体験 1」4 年間の実践と成果」
- ・ 2016 年度「自立と体験」教案
- ・ 2016 年度「自立と体験」ポートフォリオ
- ・ 2010 ～ 2016 年度 SA / TA アンケート結果

註

- i 自立と体験 1 で希望するのは学部生 (SA) が圧倒的に多いが、年に数名程度、大学院生 (TA) が希望し TA となる場合があるが、SA を中心に報告記載するため SA とする。
- ii 年度によっては、開講クラス分 SA が手配できない年度は 1 人の SA が複数クラスを担当している。
- iii アンケート項目は、2010 ～ 2013 年度までは、「①楽しんだ、②大変だった、③進めやすかった、④難しかった、⑤関係に変化があった」としていたが、2014 年度に文言の見直しをし、現在の設問となっている。